タレブ『まぐれ』の要約

寺尾　敦

# 第７章　帰納の問題

命題はしばしば，証明不可能で，反例による反証だけが可能である．こうした命題を帰納的に支持する証拠を集め続けることはできるけれども，反例がひとつでも見つかった瞬間に命題は否定される．たとえば，「黒い白鳥はいない」という命題は，白い白鳥を観察し続けても，決して正しいとは証明されない．黒い白鳥が１羽でも見つかれば，この命題は反証される．

カール・ポパーによれば，「正しい理論」は存在しない．存在するのは，反証された理論か，まだ反証されていない反証可能な理論だけである．科学とナンセンスを分けているのは，この反証可能性である．

経験から得られた知識は，それがどのようなときに役立つのか，そして，どこに限界があるのかを理解しておく必要がある．統計学と帰納法は経験から知識を得る有益な方法であるが，いつでも役立つわけではない．情報の増大とともに増えていかない種類の知識があるのだ．過去のデータから「市場が３ヶ月間で20％以上下がることはない」と考えることは，「黒い白鳥はいない」と考えることと同じである．この命題は決して証明されない．

トレーダーは，どうなったら自分の仮説が間違っていたことになるのかをはっきりさせ，どこでストップロスを行うのかを決めておかなければならない．統計学や帰納法のように，なんらかの観察結果に基づいて取引を行うことはよい．しかし，リスクの管理にこれらを使ってはいけない．ランダム性がリスクとなるときは，統計学や帰納法を用いた一般化に頼ることは危険である．帰納的な一般化を行うと記憶の負荷は引き下げられる．しかし，一般化によって現象のランダムな部分はわかりにくくなる．